

二〇二〇年度 第一回入学試験問題

国語 (五十分)

この冊子さっしには、

文章一

文章二

の二つの文章があります。

文章一

鳥の体は羽毛うもつにおおわれていて、その姿はたいへん美しい^①。羽毛を全部むしってしまうと、とたんに鳥の体はおそろしく貧弱ひんじやくに、おそろしくみじめに見える。

この状態で鳥の体を見ると、たいへん首が長いことに気づく。同時に、その首は実にしなやかで、前後左右どちらでも思うままにたわむし、頭をもって引っぱってみると、口先は体のほとんどどの部分にも届く。実際、生きている鳥は首を曲げたり伸ばしたりして、くちばしを体のあちこちへもって行って、羽づくろいをしている。

われわれにはとうてい不可能な、このように **A** な首の構造は、鳥が飛ぶ動物であることの直接的な結果である。飛ぶのに必要なのは **B** であって **C** ではない、と読者は思うだろうが、生物の体の構造はそれほど簡単でもないし、バラバラなものでもない。たしかに、鳥が飛ぶのは翼はばによってである。しかし、へビにあのままの体で翼が生えたら、果たして飛べるだろうか。おそらくは **D** である。それは、なぜだろうか。

② 動物の運動も、車と同じく物理学の法則に従っている。動

物独自の運動の法則などというものはない。イギリスの生理学者グレイ（一八九一〜一九七五）が、その著書『動物の運動』の中でくり返しくり返し述べているとおり、動物も車も他の物に与えた反作用の分だけ移動するのである。もし、へビに翼が生えたとしても、翼を打つたびにその分だけ体がぐにやりと曲がってしまうだろう。つまり、反作用は他の物である空気ではなく、自分の体に与えられてしまうのである。それでは飛ぶことはできない。したがって「翼あるへビ」は、この言葉がわれわれに与える神秘的な印象ほどには、神秘的にならないだろう。

鳥は、この問題を次のように解決した。すなわち、翼（本来は前肢ぜんし）のつけ根である胸を頑強がんきやうにし、腹部とあわせた胴体どうたいを一つの硬い骨の箱にしまったのである。そのためには、脊椎骨せきついこつの連なり方も密になったし、肋骨ろつこつも幅広くなくなった。胸骨ちゆうこつには竜骨りゆうこつができ、丈夫じやうぶさを増すとともに、大きな翼筋の支持台ともなった。

こういう頑丈な箱についた翼が一たび打てば、そのエネルギーはほとんどそのまま空気に伝えられ、その反作用として鳥は空中に浮かび、移動できる。 **X**、飛べるわけである。

すぐ後で述べるように、鳥は空気をバタバタ打って飛ぶのではない。 **Y**、翼の動きで生じたエネルギーが空気

に与えられなければ、鳥が飛べないのは確かである。そのためには、胴がグラグラしない硬い箱になって、翼の支持台とならねばならなかった。鳥は、これを実現したのである。

鳥と並んで空を飛ぶ動物である昆虫類でも、胸部は硬い箱状になっている。これは、まったく系統の違う二つの動物群が、^③同じ物理的問題を同じ方法で解決しているという点で、興味深いことである。

さて、鳥は飛ぶという生活への物理学的要請から、体の胸部を一つの頑丈な箱に変えてしまっている。この箱は、もはやねじれたり曲がったりしない。その点で、鳥の胴はネコやイタチのように、しなやかなしぐさをすることができない。そこで、首がそれを補うほかなかったのである。

Z、鳥の首がブタの首のように短く、自由に動かなかつたら、箱みたいな胴をもつ鳥はなんとも生活できなかったであろう。第一に、地上の食物をついばむことさえできなかつただろう。そのような動物が存在不可能なのは、いうまでもない。と同時に、四本の足しかもたぬ爬虫類から出発した鳥が二本の前肢を翼に変えてしまった分の補いも長い首でつけている。

^④鳥が飛ぶためには、首が長く、しなやかでなくてはならなかったのだ。これは一見すると妙であるが、この結論を導くところで論理の飛躍はないし、こじつけでもない。まったく

初等工学的にこの結論が得られる。

この考え方をさらに進めることができる。スズメのように二本の足をそろえてはねる小鳥は別であるが、両足を交互に動かして歩く大型の鳥（たとえばニワトリ）は、歩くとき必ず首を前後に振る。これもおそらくは、胴体の箱形化と関係があると思われる。哺乳類のように歩行のとき体を屈曲させて平衡をとれない鳥類は、「首で調子をとる」ほかないのである。

（野田春彦 日高敏隆 丸山工作『新しい生物学 第3版 生命のナゾはどこまで解けたか』講談社より）

文章二

——いつも思いだす、仮入部^①で入ったブラスバンドクラブの練習風景。ぼくは小学三年生で、たしか六月の土曜日の午後だった。

「こいつが入ったら、曲がぐちゃぐちゃになる。おれ、もうやめる！」

「おれもっ」

隣のクラスよかりの男の子が二人、顔を真っ赤にして立ち上がった。いまと違ってはその子たちの顔も名前も覚えていないけれど、楽器のパートが同じだった。金管バンドとはいえ、実質的には吹奏楽団ウインドオーケストラで、弦バスげんはないものの、だいたいの木管楽器はそろっているクラブだ。

おそろしくばらばらのテンポと吐きそうなくらいひどい音程で、めいめい「威風堂々いふうどうどう」のマーチを演奏していたクラブ員たちが、ぴたっと楽器を吹くのをやめる。またか、といううんざり顔でぼくを見た。

② 合奏が止まるのは、これで四回目。

先生が困ったように、ほったたをポリポリかいている。顧問の先生とは別に、新しくクラブの外部指導者になった先生

は、学校の先生じゃなくて、地域のボランティアだった。関西弁で、クマみたいなヒゲ面ひげづらをしていた。

「あー。いちお、聞くけど。きみ、なんで一人だけ速く吹くんや」

ぼくは小さくなってうつむいた。なんでって、ついさっき聴かされたCDとびったり同じテンポで吹いているだけだった。無言のぼくを見て、ヒゲクマは苦笑した。

「……うん。まあ、速く吹いてるというより、きみ一人だけ譜面ふめんどおりなんやけどな。テンポ110、速くアレグロ、きわめて熱烈フオーコに。怖こわいくらいぴったりや」

ぼくの楽器はお月様の色をしていた。いわゆる金管楽器の一つで、伸ばして繋げると全部で約六メートルにもなる管が渦巻き状うずまに、膝ひざの上に置けるくらいのサイズにくると丸まっている。金属製のカタツムリみたいな形の本体のおしまいに、朝顔あさがおみたいな大きなベルがついている。それがフレンドホルンという楽器。

前のブラバンの先生に、ホルンは「スター・ウオーズ」のテーマで大活躍かつやくするんだぞっと力説りきせつされても、はあ、という感じだ。

母親に、「あなた、音楽、向むかいいてると思うよ」なんて背中を押されて、小学校のブラバンクラブに入らされたのが仮

入部のきっかけ。自分で選んだわけじゃない。むしろ音楽なんて嫌いだ。幼稚園のころから、嫌な思い出しかない。

適当に参加して、しばらくしたら母親にも言わずにやめてやろう。そう思っていた。なるべく目立たず、いいかげんに流しとこうって。

でも楽譜とCDのとおりには吹いているつもりなのに、ぼくがしばらく吹くと、周りはなぜか演奏を止める。これじゃ流すこともできない。

「じゃ、気をとりなおして、もっかいアタマから。さん、ハイ、で」

今度は同じホルンだけじゃなく、ユーフォニウムや、クラリネット、トランペットパートのやつらからも不満そうな声があがった。

「えー。何回やっても、そいつがいたらいっしょじゃん」

「もういいよ、ブラバンつまんない。サツカーのほうが楽しいし」

「いこいこ！」

まず、六年生の男子たちが、楽器をぞんざいにケースにしまいはじめた。

「お、おおい。ちよつと待て……」

教室を飛びだしていく男子たちを、ヒゲクマがあわてて止めようとしているうちに、女子たちが困った顔でぼくを見た。

どうしようかとおたがいに目配せしはじめる。

「――今日はもう終わりや。また来週、同じ時間に」

「だれも来るはずない、とぼくは思った。」

最後まで残ってくれていた幼なじみの女の子も帰ってしまった。教室には、たった一人、ぼくと、ぼくの譜面台と楽譜、そしてヒゲクマだけが残された。ヒゲクマは苦笑して、ぼくの肩をぽんと叩いた。

「すまん。音楽の先生にも話は聞いたつたんやけど。子どもに教えるの、はじめてやねん。次からはもつとうまく仕切るから、かんにんやで」

楽しいはずのクラブの練習時間がまた自分のせいで台無しになったことを、ぼくは知っていた。先週、先々週とまったく同じ……幼稚園の音楽の時間から変わらない。最後にひとりぼっちになるのがぼくだった。

元々の顧問である小学校の音楽専科の先生は、ちつともまとまらない子どもたちにさじを投げて、外部のヒゲクマを連れてきた。

みんなに迷惑をかけるならもうブラバンになんか来なければいいのに、わざわざやってきて、ひとりぼっちになった自分を、不思議に思う。音楽なんて嫌いだ。自分が周りになじめないことだって、わかっている。だのに冷蔵庫のドアポケット

トからこぼれた卵みたいに、ぼくは勝手に床に落ちてぐしゃぐしゃになる。

もしかしたら、仮入部するまで名前も知らなかった金色のカタツムリに、触れていたいのだろうか。遠雷みたいな音を、自分も出してみたいのだろうか。

ぼくは黙って楽器をかまえると、さっきの続きを吹きはじめた。運動会で聴いたことのある、この曲で一番有名なメロディ。

ヒゲクマが笑いながら、楽器を拭くクロスを差しだした。

「ええマエストーンや」

いつの間にか、目からボトボトと水が落ちてきて、ズボンの太ももにしみを作っていた。まさかオイルのしみたクロスで涙を拭けって？ カッコわる、とぼくは、泣きながらつぶやいた。

なんで涙が出るんだろう。先週は数人だったのに、今回は結局全員が出たことがショックだったのか。それともまさか、ヒゲクマに演奏を邪魔されたのが辛かったのか？

わからない。とにかくぼくの身体にはまだマーチが流れ続けている。

「もう譜読みしてたんか。合奏ではまだ練習してないところ」

「……さっき、CDで」

聴いたから。鉄っぽい味のマウスピースから口を離して言うと、ヒゲクマが息をのむ。

「経験者、やんな。ホルン、いつから吹いてるんや」

「一か月前」

そう答えると、ヒゲクマは腕組みをして黙り込む。

「——あのな、じつはセンセも楽器吹くんや。これでも、日本じゃちつとは名前の通ったホルン吹きなんやで」

大きな秘密を打ち明けるように言うと、にかつと笑う。

「おもしろいこと、しよか」

ホルンのベルはうしろを向いている。マウスピースを接続するマウスパイプが身体を中心にくるように注意してかまえ、ベルを腰に引き寄せる。まだ身体が小さい子どもは、ベルの端を太ももに置いて、右手指をベルの中に入れる。指をやりわりと丸め、人差し指と親指の根元で作った台で楽器の重みを支える。

「ほい、ベルアップ！」

ヒゲクマのかけ声で、ベルに入れた右手を高く持ち上げる。正面から見て、ホルンが真横になるように。一瞬で。めっちゃ

くちゃ、重い。

「ベルダウン！」

さつと下ろして、いつものかまえ。それからまた、ベルアップ

「プ。何度か繰り返すうちに、汗が噴きだし、腕がしびれてくる。」

「腕つりそうやる。ホルンで、二キロ半くらいあるからな」
笑うヒゲクマを、じつとりと見上げる。

「……ベルアップって何のためにやるの？」

「……ベルアップって何のおもしろいのか。」

「ずばり、ハッターリや。音響的な効果は、ない！ 客をびびらせたいときにやる。マーラーゆう作曲家のオッサンなんか、そのために曲の最後にホルン全員立たせるねんぞ」
「効果もないのに、なんでやるの」

「だから客がびつくりするやる。そしたら、おもしろいやる。さ、ベルアップ。音出してみ」

やけになって、ぐっと楽器を水平に持ち上げる。精一杯大きな音を鳴らした。顔はきつと真つ赤だろう。ベルがビリビリと震えるのが、右手から全身に伝わる。大きい音は鳴ったけど、音がひしゃげて気持ち悪い。けど、ちよつと気持ちいい。

ヒゲクマはかかかつと笑う。

「音楽は音を楽しむと書く。ミュージックさえ喜ばば、ステージで何やってもええ」

「ミュージック？」

「芸術の女神様のことや。ミュージックは個性的な女でな、九人

もおる」

「……個性的っていうか、それ別人じゃ……」

このクマはまったく人の話を聞かないクマだった。

「その中で笛を吹くのがエウテルペ。楽器吹きを守ってくれる女神様やで。おまえもさつき、エウテルペに見られてた」

「何だか気味悪い。ぼくは困惑する。」

「さつきのソロ、ベそかきながら吹いてたときな。あれにはミュージックも喜んだやろなあ。情熱的や」

ヒゲクマは何だか嬉しそうだ。ふつう、子どもが仲間外れにされて泣いていたら大人はあわててなぐさめる。でもヒゲクマは喜ぶ。変な人だ。

「——おまえの、その音色、音程、音量。その歳で、しかもたかが一か月でだれもができることやない。それに耳がよすぎる。みんなと違うって、しんどいやろ」

ぼくはうつむいた。心のどこかで、きつと、ずつとほしかった言葉がさらりと急に降ってきて、うろたえる。声が震える。

「……ブラバンなんかやめる。続けてもいいこと、一つもない」

「い」

「まあ、ないわな」

「え？」

「やめれるやつは、サッカーいくやる。呪われとるよ、おまえ」

ミュージズに。そうつぶやくヒゲクマはやっぱり嬉しそうだ。

話を聞かないヒゲクマは、ぼくの腕をぐいぐいと引っ張った。クラブ活動中はいつも職員室にいる顧問の先生に頼み込んで、視聴覚室を開けてもらう。

ヒゲクマはさっそくテレビとDVDプレーヤーの電源を入れる。自分のリュックサックから、一枚のDVDのパッケージを取り出す。虹色に光るDVDがスロットに吸い込まれていくのを、戸惑いながら見つめる。

パッケージには、指揮棒を持った外国人のおじいさんの写真。真。

「チャイコフスキーの交響曲第五番や。ソリストで、わかるか」

ぼくは首を横に振った。ほとんど日本語に聞こえない。

「独奏ゆうて、曲の中で一人で演奏する独立したパートがソロ。ソロを吹くのがソリストや。これからおまえに聴かせるのは、ホルン吹きならだれでも知ってる有名なソロや。奏者^⑩は、まだ二十代やのに生意気なやつでな、ソロしか吹きたくないって公言しとる。おれが思うに、数年以内に世界で一番ホルンが上手い男になる。……悪いけど第二楽章まで、とばすで」

ヒゲクマはリモコンを操作すると、すばやく部屋の電気を

消した。

ステージがテレビ画面に映しだされる。半円形の舞台。観客の咳払いの音。かすかなざわめき。黒い礼服を着た男女全員が、無言で指揮者を見つめている。張りつめた空気の中、指揮棒がふ、と上下にすべった。分厚い樹皮を束にしたような、ぞくつとする音が流れた。

画面の中央にホルンパートが映る。その中で、ホルンをかまえた一人の奏者の顔がアップになった。銀色がかった髪をした、うちの父さんよりもずっと若い外国人。かまえたホルンは彼の髪よりまばゆい白銀色だ。

豊かな、かなしげな音色が流れた。いや、これはホルンなのか、とぼくは目を見開く。うろ覚えのスター・ウォーズのホルンとはまったく違う。

「……何これ。音がうねうねしてる」

「ロシアン・ヴィブラートや。戦後から八〇年代くらいまでのロシア人ホルン奏者が好んでやっていた演奏法やな」

ヒゲクマはいったんDVDを止めて、いたずらっぽい顔でこつちを見る。

「ホルンなのに、ヴィブラート？」

ヴィブラートくらい、ぼくだって知っていた。音を細かく揺らす演奏法だ。でも、フルートなんかと違って、ホルンは音をまっすぐに吹かなければいけないと、顧問の先生に教

わった。

「ま、いまだきオケ……オーケストラじゃやらんわな。時代遅れやし、なんか浪花節っぽいし。でもこいつはあえてやる。しかも指揮者に無断でやる。それで、だれも文句言えんくらい、めっちゃ聴かせる。言うたやろ、

※ ……

「何をやってもいい」

ついに涙を止めて、ぼくはくすつと笑う。先生も、ヒゲ面をくしゃくしゃにして笑う。

「そういうこっちゃ。さ、続きや。目ェ閉じ」

言われたとおり、素直にまぶたを閉じる。

風いだ海のようにゆらめく音楽がまた流れだす。優しげなのに、なんて堂々として威厳に満ちた音楽だろう。一つ一つの波を、音を、食い入るように追いかける。追いかけて、指先で触れ、口の中に含む。

ヒゲクマがささやく。

「これがソロや。ソリストや。おまえの音のほかに音はない。伴奏以外、ホールに響くんはおまえの音だけ。バンドで、オケで、おまえの音がだれより美しい。楽器はおまえの喉や。カンタービレ、てわかるか。歌うように吹く。すすり泣くように歌う」

ぼくは夢うつつで、耳をはむホルンの音色に自分をゆだねた。ぼくはアタマの中で楽器をかまえ、喉を鳴らしてマウス

ピースに口づける。

「——真剣に楽器やるのは、絶対辛い。でもかならず、一瞬でもやっててよかったと心底思うときがある。おまえを理解するやつがきつと現れる。だから、今日みたいなことがあっても、音楽を嫌いになるな。ミュージスは戦うやつが好きなんや。ベルアツプやで、自信を持って。楽器を、自分を、誇れ」

なぐさめになつてない、とぼんやりと思う。

その一瞬のために、ひとりぼっちでいるというのか——ぼくは正体不明の熱に浮かされたまま唇を開く。

「このホルンの人。この人の名前は……」

「レオニード・アプト」

完璧だ。完璧。この音こそが完璧。レオニード・アプト、ソリスト。

ああ落ちた、と。ぼくは、ふいに思う。

音を立てて。心臓に——雷が。

(黒川裕子『奏のフォルテ』講談社より)

国語 (一)

受験番号

氏名

一枚目 二枚目 合計

一、次の——線のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

1 タイキヨとして押しかける。

2 キリツの厳しい部活。

3 政府のヨウジンがいらっしやる。

4 キュウトウ器がこわれる。

5 優勝候補のヒットウ。

6 負けはヒツシの状況だ。

7 人生のイギを問う。

8 第一線からシリゾク。

二、別冊の「文章一」を読んで、次の問いに答えなさい。(句読点や記号も一字と数えます。)

問一 ——線①「たいへん美しい」とありますが、「たいへん美しい」ものとは何ですか。文章中の言葉を用い、十字以上十五字以内にまとめて答えなさい。

10

問二 空らん A に入る最もふさわしい言葉を次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。
ア、千差万別 イ、十人十色 ウ、多種多様 エ、自由自在 オ、自画自賛

□

問三 空らん B C に入る最もふさわしい漢字一字を文章中から探し、それぞれ抜き出して答えなさい。

B C

問四 空らん D に入る最もふさわしい言葉を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア、不 イ、否 ウ、悪 エ、無

□

問五 ——線②「動物の運動も、車と同じく物理学の法則に従っている」について

(1) ここでいう「物理学の法則」を「グレイ」はどのように説明していますか。解答らんに合うように十五字以上二十字以内で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

すべてのものは
どうなるか。

(2) この法則に従うと『翼あるへビ』が飛べないのはなぜですか。その理由がわかる連続する二文を文章中から探し、一文目の始めの五字を抜き出して答えなさい。

□

問六 空らん X Y Z に入る最もふさわしい言葉を次のア～オの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

X Y Z

ア、しかし イ、つまり ウ、あるいは エ、それとも オ、もし

問七 ——線③「同じ物理的問題を同じ方法で解決している」について説明した次の一文の空らん当てはまる言葉を、それぞれ指定された字数で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

翼や羽のエネルギーを「ア (二字)」に伝えて飛ぶために、胴体を「イ (三～五字)」にした。

ア イ

問八 ——線④「鳥が飛ぶためには、首が長く、しなやかでなくてはならなかったのだ」とありますが、「飛ぶ」こと以外で鳥の首が「長く、しなやかで」あるから可能になっていることを二つ答えなさい。ただし、この傍線部より前と後ろの文章からひとつずつ答えること。

□ □

